

概念の位置づけを考える

—マクダウェル—ドレイファス論争から生態学的言語論を経て—

Considering the Position of Concepts: From the McDowell–Dreyfus
Debate through the Ecological View on Language

村松泰知

Abstract

This paper considers the position of concepts: where and how do they function in our experience and lives? We will first refer to the McDowell–Dreyfus debate, which concerned conceptual capacities. The need to make intelligible the connection between absorbed experience and reflective thought and the similarities and differences between humans and animals with respect to rationality will be found there. We then refer to the ecological view on language and describe an appropriate theory that can meet this need. Concepts will be seen as material tools used in social practice, and conceptual capacities as the skill to use these tools.

(1) 研究テーマ

生と概念との関係は、倫理や生き方に関わる問題にとって重要である。こうした意識から本稿は、私たちの経験や生における概念の正確な位置づけを提供しうる理論を見出すことを目指す。そのために、マクダウェル—ドレイファス論争を参照しこのテーマに関する重要な問題点や考え方を受け取り、生態学的立場における言語論を参照しつつ、説得的な理論を提示する。

(2) 研究の背景・先行研究

経験と生における概念の位置づけ、概念の内実や働きを考えると、マクダウェル (M07a, M07b, M13) とドレイファス (D05, D07a, D07b, D13, D15) との間の論争は有益でありうる。それは〈私たちのあらゆる経験には遍く概念が浸透している〉とする前者とそれを否定する後者の論争だったからだ。

マクダウェルの「一般概念主義テーゼ」(D13: 15) は、より正確には「成熟した人間においては、身体化された対処に精神性が浸透している」(M07a: 339) というものだ。言語・概念を獲得した人間の経験は全て、動物や幼児とは全く異なる特有の合理性・概念性を備えているというのだ (cf. M13)。

こうした考え方に対し、ドレイファスは「それは現象に忠実でない」(D07a:

353)として次のように主張する。私たちの日常的で基礎的な振る舞いは非概念的な身体的対処なのであり、概念的な反省的思考はそれを中断するものであって、私たちが概念能力 *conceptual capacity* を行使するのは常にはないのである。私たちは大人になり成熟した後も、概念・言語を有しない動物や幼児と知覚や行為の基礎的な経験を共有しており、概念的・反省的な思考や理性はそれらの基礎的経験を変形した派生的なものなのだ (cf. D13)。

両者のこれらの主張から、概念の位置づけという問題におけるある重要な論点が明らかになる。すなわち、身体的で基礎的な地上階 *ground floor* と反省的で派生的な高層階 *upper floor* との関係性、人間と動物との基礎的な共通性と派生的な差異の発生、といった事柄をどう理解するかという論点である。さらにこの論点は両者の論争の最も根源的な対立点でもありうる。

飯嶋によると、両者の対立は両者の哲学的「描像全体の相違」に基づき、それらは「理性と自然の二元論」の拒否 (マクダウェル)、「生物がある環境の中で様々な能力・技能を獲得し派生させていく」動的な過程の哲学的解明 (ドレイファス)、という両者の問題関心に発する (飯嶋 2017: 25–6, 強調原文)。これらの関心からは、上の論点に関して以下のような形式的条件が要請される。〈地上階と上層階で概念性・合理性に関する性質は共通している〉 (マクダウェルのテーゼ)。〈人間と動物において概念性・合理性に関する性質が共通している基礎的な階層とそれが異なる派生的な階層が存在する〉 (ドレイファスのテーゼ)。これらが対立を引き起こすことは容易に想定できる。両者の論争はこれらの一般的なテーゼ間の対立として理解できるのだ。

本稿は両者の論争から、上述の論点を概念の位置づけに関する重要な問題として引き受ける。次節では、説得的で有意義な両者の哲学的関心を共に受け入れるため、両者のテーゼを共に維持しつつ矛盾を生じない描像を描きたい。本節では以下、両者の議論の問題点とその解決の方向性を考察する。

まず、両者の理論の共通の前提を確認する。両者は、私たちの日常的行為がどのように生じているのかに関して同じ見解を有し、私たちは日常の行為のエキスパートであり、有徳な人が徳を発揮するのと同じ仕方で、その意味で有徳な人として振る舞っているのだという。その振る舞いの仕方は、表象的な命題を操作することなしに、状況特異的な仕方で世界から適切な振る舞いへと導かれるというものだ。その人はその人の徳、技能に応じて特定の側面が「せり出した」世界に開かれており、その世界を知覚することで適切な行為へと導かれる (M07a: 339–42)。その人の世界は特有の「誘引と反発の力線」に満ちており、その中で身体-環境ゲシュタルトの緊張・不均衡の感覚を低減させるような反応へと引き寄せられることで適切な合目的振る舞

いが生じる (D13: 17–8; D15: 47–9)。

さらに以下のことも両者の間で共有されている (cf. M07a: 340–1, 344; M13: 51; D05: 51)。こうした過程は次節で解説するアフォーダンスへの対処として適切に理解されること。徳は社会的・文化的背景のもとで身体的技能として獲得されたもので、私たちは非生得的・非自然本性的な第二の自然を獲得していること。以上の全てのことが人間と動物に共通していること。

両者はこのような重要な前提を共有し、私たちの日常的な振る舞い、基礎的な階層で起こっていることは動物とも共通した非反省的行為、没入的対処 **absorbed coping** であることを認めている。だが、マクダウエルは人間においては主体に開かれている「せり出した」側面を含んだ世界は概念と理由を含み、私たちは常に概念能力を働かせていてそこで知覚される理由によって行為へと導かれるのだとし (cf. M13)、ドレイファスはその「誘引と反発」の世界は概念や理由を含まず、没入的対処の中では主体と世界は未分化であり、私たちが概念能力を行使し理由に基づいて行為をするのは没入的対処を中断して反省的思考をする場合に限られるのだとする (cf. D13)。

では、なぜマクダウエルは、成熟した人間においては動物とは異なり、常に「概念性 **conceptuality**」が「働いている **operative**」という、不明瞭な用語に基づいた (D07b: 372) 主張をするのか。マクダウエル (M13: 47–9) によると、成熟した人間は常に、没入的対処の途中でさえ、どんな仕方であれ理由への問いに答えることができる。これは、その人が常に、「自らが何をなぜしているのか」に関する特別な自己知を有し、人間に特有の行為者性を行使していることを意味するのだという。ここで、理由の応答は没入的対処を中断するかもしれないが、それはその人がそれまで特別な自己知を有していたことを妨げない。こうして、人間においては動物とは異なり常に、没入的対処は理由に基づいた「なすべきことの概念の現実化 **realizing a concept of a thing to do**」(ibid.: 48) であり、そこで概念性が働いているのだとされる。

だが、このことは、人間と動物との間で、没入的対処の生起に事後的な理由の語りの生じ方、言語的表現の可能性において違いがあることしか示さず、非反省的行為そのものの現象としての生じ方において差異があるということ帰結しない (Rietveld 2010: 197)。マクダウエルが人間の地上階の非反省的行為にまで概念と理由の存在を認めようとするのは、それが純粋な因果的出来事となり規範と自然の二元論が導かれることを避けようとするためだと考えられるが、地上階に別の仕方で規範の存在を認めることもできる (ibid.: 202)。第二の自然を獲得している人間と動物とが地上階で開かれている世界は「規範的重要性の領域」(ibid.: 200) なのであり、そこでの適切な応答は、

環境や社会的・文化的実践への規範的で合理的な応答となっているのである。

私たちはここで、人間に特有の反省的思考に伴う明示的な概念・理由と、動物とも共有された没入的対処において現れる非明示的な概念・理由とを区別しそれぞれの存在を認めることで、地上階に人間的概念性の浸透を認めずに規範性・合理性を認められるのだ。ドレイファスが前者の「十全で多くを要求する」概念を「概念」、後者の概念を「原概念 protoconcept」と呼ぶ(D15: 78)のになら、明示的なものを「概念」「理由」、非明示的なものを「原概念」「原理由」と呼ぶことにする。だが混同を避けるため、前者をその明示性から「明概念」「明理由」とも呼びたい。門脇(2010: 157-9)の言葉では、前者は「信念や推論の一部として論理的に構成要素となる」概念、「信念による信念の正当化の連関や、命題によって構成された推論的な空間」における理由であり、後者は「生き方を形成するための世界の分節化の能力」としての概念、「行為を発現させる力を備えた了解の仕方」としての徳=理由である。

この場合、原概念・原理由と概念・理由との関係が問題となる。ドレイファスはこの関係の記述が最も重要な課題なのだと論争の中で繰り返し、地上階の没入的対処の中で現れる非明示的な原概念・原理由を明示化・焦点化によって変形・変換したものが高層階の思考に伴う概念・理由なのだと語るが、その変容過程の内実は明らかではない。ここでの明示化は典型的には分析的注意や応答的な発話による言語化、命題化だ(cf. D05: 59-61; D15: 84-6)。

だが、言語化等による明示化や反省的思考は、そもそも本当に地上階から遊離的なもので、没入的対処のフロー flow を中断するものなのか。こうしたドレイファスの想定を Gallagher(2016: 140)は否定する。熟達者は、フローの中でいつ、どのような思考をすれば最も良いパフォーマンスを発揮できるのかを熟知しており、そのことがその人の熟達者的技能を構成している。反省的思考は技能的な身体的対処なのであり、没入的対処と異なるものではなくその一部なのだ(ibid.)。そしてこの行為としての反省的思考の技能の獲得と実践もまた、社会的相互作用の中に埋め込まれている(ibid.: 142)。

以上を踏まえると、反省的思考や明示的な概念使用は地上階から遊離した高層階にあるのではなく、非明示的な規範性・合理性・概念性を有する地上階での身体的・技能的・社会的な非反省的行為・没入的対処の一種となる。この場合、私たちの日常的な知覚・行為のあり方としての没入的対処の一部に明示性・反省性が付与されていたことになる。その付与の基準はアフォーダンスへの対処という没入的対処一般の生じ方ではなく、全体論的なアフォーダンス配置全体のその具体的変容を可能にして生じさせた条件、物質的な環境の側の条件になければならない。この条件を明らかにしつつ、人間と動

物の連続性と差異の発生とを理解可能にし、規範的な高層階と自然的な地上階との断絶を拒絶する描像を描くこと。これが私たちに残された課題だ。

(3) 筆者の主張

以下では、生態学的立場における言語論を参照しつつ、前節で提出された課題に答えうる、概念の位置づけに関する適切な理論を提示する。

生態学的立場とは、J・J・ギブソンの生態学的心理学、とりわけそのアフォーダンス理論を中核にした哲学的立場のことである。ギブソンによると、アフォーダンスとは、良いものであれ悪いものであれ「環境が動物に提供する」(ギブソン 1985: 137) 行為可能性であり、人間を含むあらゆる動物はこうしたアフォーダンスを知覚しそれに導かれる仕方で行動している。諸々のアフォーダンスの配置の全体こそが、私たちがそれに出会いそれに対処し、その中で生きている世界なのだ。生態学的立場からみると、アフォーダンスの導きによる知覚－行為連関の作動とそれによるアフォーダンス配置の全体的な変容という過程こそが、第一義的に生じている事態なのである。

生態学的立場においては言語もこの過程との関係性の観点から理解される。リード (2000: 324) は言語を「それによって人々の集団が自分たちの行為と相互行為とを調整する過程の一部」と捉える。染谷 (2017: 178) もまた言語を「発話もしくは表記として、人間が集団的に自分たちの行為や相互行為を調整するために環境内につくり出した環境資源の一種」とする。

この生態学的言語論における言語について、少なくとも以下の重要な特徴を指摘できる。(a) それはまず音声や文字といった物質的な対象として存在する (b) それはある機能をもった物質的な道具である (c) それは社会的な相互行為、共同体内での実践において用いられる共有された道具である (d) その機能は自己と他者それぞれにおいて、特定のタイプの認知作業と行為とを誘導し特定のタイプのアフォーダンス配置の変化を現出させることである。

概念も言語と全く同様に、ある種の社会的実践において使用される物質的な道具だと考えることが可能だ。このとき、言語・概念の使用はそれらの道具の使用、言語・概念能力はそうした道具使用の技能となる。Alessandroni et al. (2024: 95) もまた、「概念的思考 conceptual thinking」を社会環境における習慣化・技能化された「物質的対象操作 thinging」であるとする。

それでは、概念はどのような社会的実践の中で用いられる道具なのか。人間の概念はとりわけ合理性＝理由による正当化可能性と結びついたものとされている (D15: 78)。そこで、理由を問い答える社会的実践において用いられうる物質的道具こそが、人間の使用する明概念・明理由なのだと考えたい。

人間の言語および理由の規定によっては概念と言語の両道具の外延が一致する可能性があるが、これらの定義は異なる。そして、この特定のタイプの道具の並べ替え・配置の共同体的ゲームに参加する技能を有することが、人間に特有の明示的な概念能力を有し理由の空間の住人であるということとなる。

またこれらの道具を使用した行為の一タイプが明示的な反省的思考とされる。諸対処を可能にし、成立させる道具のタイプが、前節で問題にした没入的対処の一部への明示性・反省性の付与の基準だったのである。高層階での人間的合理性の有無とはこの道具の有無に他ならない。地上階から遊離した高層階とされていた派生的階層は、基礎的階層での没入的対処の内部で用いられる物質的道具によって規定された階層、それらの道具の集合なのである。

ところで道具の使用は一般に、その道具に特有の認知作業や行為を導き、特有のアフォーダンス配置の構造的変容パターンを現出させる。またその使用の可能性を技能として所有している限り、アフォーダンス配置の世界はその可能性を含む特有の仕方で現れ続ける。この意味で、道具の使用とその技能の獲得は世界の現れ方をその道具に特有の仕方で一変させるのだ。〈成熟し言語・概念を獲得することで人間の世界は一変し常に動物とは異なるものになる〉というマクダウェルの考え方 (cf. M07a: 344) も、この道具一般の機能としての意味では理解可能になる。ドレイファスの概念の発生根拠への問いもまた、特定のタイプの道具の発生可能性の問題として理解可能になる。

以上の考え方を踏まえると、規範と自然の二元論の拒否というマクダウェルの目標と〈地上階と上層階で概念性・合理性に関する性質は共通している〉というテーゼは満たされる。高層階も地上階の一部なのだから、上下階層の断絶・遊離は当然回避され、また人間と動物とが共に常にその中で生きている地上階は、常に非明示的に概念的・合理的な規範的重要性の世界なのだ。

人間と動物の共通性と差異の解明というドレイファスの目標と〈人間と動物において概念性・合理性に関する性質が共通している基礎的な階層とそれが異なる派生的な階層が存在する〉というテーゼもまた満たされる。人間と動物が世界に対処する仕方は全く同じ共通のものなのだが、その中で用いられる道具のタイプに差異があるのだ。そして規範的世界としての共通の基礎的階層には非明示的な合理性・概念性が含まれるが、特定の道具使用可能性としての明示的な合理性・概念性は人間に特異な派生的階層なのである。

こうして、本稿が提示する概念に関する理論はマクダウェルとドレイファス双方の哲学的関心に沿い両者のテーゼを満たし、両者の論争を調停するものでありうるのだ。最後に、これまでの議論を踏まえ、私たちの経験と生における概念の位置づけに関する最も適切だと思われる描像を記述しよう。

人間と動物とはともに、基礎的階層＝地上階で諸々のアフォーダンスに対処しながらその配置としての世界を生きている。これが常にすでに起こっている第一義的な事態である。そこでの対処は身体的・技能的・社会的な非反省的行為・没入的対処であり、世界への適切な応答は環境や社会的実践への非明示的だが規範的・合理的な応答となっている。私たちが常にすでに生きている、第二の自然に開かれた世界は原概念・原理由に満ちた世界なのだ。

人間と動物とはしかし、物質的な身体構造の違いやそれによる生態学的ニッチの違いなどによって、利用可能な物質的対象・道具やその使用方法に違いを有する。人間は器用に発話や表記をし、特有の音声や文字などの共有されうる物質的道具を使用することができる。こうして、人間は理由のやりとりの社会的実践・相互行為に参加することができる。これが明概念・明理由という道具の使用可能性であり、明示的な合理性・人間的な概念能力を技能として所有するということなのだ。派生的階層＝高層階とは、この道具の使用可能性において規定される層、あるいはこの道具の集合なのである。また明概念・明理由という特定の物質的道具が使用可能である限りにおいて、人間の原概念の世界はその道具使用可能性に特有な仕方で開かれ続けている。

(4) 今後の展望

本稿の提示した概念の理論は、概念に関するより一般的な論点にも示唆を与えうるかもしれない。言語や概念の世界や生に対する内在性／超越性に関して、それらを物質的道具として宇宙・生物進化・社会的文化的発展・個体発達の歴史の内部に局所的偶発的現象として位置づけると同時に、それらの世界全体のあり方の恒常的全面的な構成機能をも道具一般の機能として理解可能にしている。また概念の世界が浮遊したアイデアの世界のような超越性と永遠性とを予感させるのは、アフォーダンス配置の世界に対する物質的道具の集合としての明概念の世界の独立性と持続性とに起因するのかもしれない。

マクダウェルとドレイファスは人間と動物を区別し人間だけを理性的存在として特別視していたが、この根拠となる人間と動物の事象的な差異は人間だけが理由を語りうる（ように見える）ことのみであった。しかし本稿の理論によると、この明示的な概念の使用能力は特定の道具の使用技能に他ならない。それは他の動物のもつ様々な身体的技能と同じものの一つにすぎないのだが、なぜこれだけを特別に「理性」などと呼ぶ必要があるのか。あるいは、この技能以上に人間だけの理性としての超自然的能力や内在的機能を想定することも、無根拠で空疎な神話だ。人間と動物において理由を語り得ないことを理性のなさの根拠とする論理は、特殊な技能集団以外の抑圧を正当

化する神話的論理なのだ。本稿の概念の理論の倫理的含意の検討も必要だ。

(5) 参考文献

D05: Dreyfus, H. L. (2005) Overcoming the Myth of the Mental: How Philosophers Can Profit from the Phenomenology of Everyday Expertise. *Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association*, 79(2): 47–65.

D07a: ——. (2007a) The Return of the Myth of the Mental. *Inquiry*, 50(4): 352–65.

D07b: ——. (2007b) Response to McDowell. *Inquiry*, 50(4): 371–7.

D13: ——. (2013) The myth of the pervasiveness of the mental. Schear, J. K. (Ed.) *Mind, Reason, and Being-in-the-World: The McDowell–Dreyfus Debate*. Routledge: 15–40.

D15: Dreyfus, H. L. & Taylor, C. (2015) *Retrieving Realism*. Harvard UP.

M07a: McDowell, J. (2007a) What Myth?. *Inquiry*, 50(4): 338–51.

M07b: ——. (2007b) Response to Dreyfus. *Inquiry*, 50(4): 366–70.

M13: ——. (2013) The myth of the mind as detached. *Mind, Reason, and Being-in-the-World*: 41–58.

Alessandroni, N., Malafouris, L., & Gallagher, S. (2024) An Ecological Approach to Conceptual Thinking in Material Engagement. *Europe's Journal of Psychology*, 20(2): 84–103.

Gallagher, S. (2016) The Practice of Thinking: Between Dreyfus and McDowell. Breyer, T. & Gutland, C. (Eds.) *Phenomenology of Thinking: Philosophical Investigations into the Character of Cognitive Experiences*. Routledge: 134–46.

Rietveld, E. (2010) McDowell and Dreyfus on Unreflective Action. *Inquiry*, 53(2): 183–207.

飯嶋裕治 (2017) 「マクダウェル–ドレイファス論争における「概念能力」への問い」『哲学論文集』九州大学哲学会、53: 1–32

門脇俊介 (2010) 『破壊と構築——ハイデガー哲学の二つの位相』東京大学出版会

ギブソン、J・J (1985) 『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻 (訳)、サイエンス社

染谷昌義 (2017) 『知覚経験の生態学——哲学へのエコロジカル・アプローチ』勁草書房

リード、E・S（2000）『アフォーダンスの心理学——生態心理学への道』細田直哉（訳）、佐々木正人（監修）、新曜社

（東京大学）